

社死な彼女

美真垣 稲





きみもまた死んだ兵士

稲垣真美

朝日新聞社

稲垣真美

一九二六年 京都府に生まれる

著書——『兵役を拒否した日本人』

『仏陀を背負いて街頭へ』

『内村鑑三の末裔たち』

など

きみもまた死んだ兵士

定価九八〇円

一九七七年一〇月三〇日 第一刷発行

著者 稲垣真美

発行者 角田秀雄

発行所 朝日新聞社

東京・名古屋
大阪・北九州

東京都千代田区有楽町二一六—一
電話代表 〇三(一一二〇)一三一
郵便番号 一〇〇

©Masami INAGAKI 1977

0093—254509—0042

印刷／明善印刷

I	止まった時間に	3
II	亜麻色のアルカディア	21
III	デモクリトスとマルクスの間	40
IV	嵐の中の間奏曲	58
V	その日も風が吹いていた	71
VI	ルシア横丁	90
VII	赤い浮標のまにまに	106

VIII	花のない寺にて	124
IX	夏が生きていた日	139
X	眠れぬ夜、仔犬のように	147
XI	失われた季節に	160
XII	鉄窓に死を避けざりしもの	193
XIII	きみもまた死んだ兵士	208
XIV	エピソード	227

きみもまた死んだ兵士

I 止まった時間に

時計台の文字板の針は止まったままになっていた。いつごろから動かなくなったのかわからないが、私にはそれが何か時代の象徴のように見えたものだ。

「ひょっとするとわれわれは、止まった時間に生きているのではなからうか」

ほしのままに光彩を放とうとする、本来われわれのものであるはずの時間を、何か巨大に見えるものが奪いとりとしている、無限につづくべき時間を遮ろうとしている——そんなふうにも思えた。

高等学校には十六、七から二十前後までの生徒たちが集まっていた。私自身十七歳で、まだ人生の黎明に立って、生きることについての意義を見出すのに夢中であるべきはずなのに、気がつくくと、巨大に見えるものは、汚れた手を拭いて、目の前に立ちだかっていた。日が経つにつれ、その手は厚ぼたい雲になって空を掩い、次第に重く、息苦しいほどに垂れ下がって来た。

巨大にみえるものというのは、国家の決めた戦争である。

内心のどこに問いただしてみても、そんなものを始めてほしいと頼んだことはないのに、物心ついてみると、戦争は始まっていた。やがて私は本能的に、それは巨大にみえ大げさな身振りをしているが、実は存在と呼ぶに値しない「虚構」にすぎないのではないのか、と意識の底で思うようになった。

あるいは壮大な虚構であるかもしれないものの推進者を、高校生たちでは「ゾル」（ドイツ語のゾルダーテン——軍、軍人——の略）と呼び慣らわした。そのものは、しかし、学校生活の日常に、「虚構」とばかりは言い切れない現実の影を投げて、われわれをおびやかすことがあった。たとえば、高等学校の寄宿寮に住みついてから、こんな話を聞かされたことがある。

一九三六年、二・二六事件があつて間もなくのころ、授業時間中に学校裏の土手を踏み越えて、代々木の歩兵連隊の銃をもった小隊が、駆足で校内に突撃して来たことがあつた。グラウンドを駆け抜け、教室の窓に靴音を轟かせて、寄宿寮の前のスロープにさしかかると、隊長の若い少尉は兵士たちを散開させ、校舎を敵陣に見立てて、「伏射ち、打て！」と命令した。

目撃した寮委員の生徒が、矢継早に号令を掛ける少尉のそばに詰め寄って抗議した。

「ここは高等学校の構内だ。兵営や練兵場じゃない。しかるにあなたは、無断で学校裏の柵を越えて、兵隊を侵入させている。あなたの行為は不法だ。それにわれわれの学校には正門主義のおきてがある。たとえ深夜門限後に帰寮したときも、裏門が開いていようとそこから入ることはせず、わざわざ正門に回って門衛に扉を開けさせて入る。そういうわれわれのおきてを無視して、

あなたはみだりに学校裏の土手から学園には無縁の兵を侵入させた。あなたのしていることは二重に不法だ」

これを聞くと、士官学校を出て任官後間もないらしい少尉は、血色のいい顔をいっそう紅潮させて、

「何を言うか。この小隊はおれが指揮している。貴様等の余計な指図は受けん——射撃をつづける。目標、前方の校舎入口、射て！」

と分隊長の下士官たちを気色ばんで叱咤した。

寮委員の生徒は引下がらず、威丈高な少尉を逆に難詰した。

「いま言った通り、学園には学園のおきてがある。従わないのは不法だ。あなたがあくまで校内のおきてに従わないというなら、正式に連隊に抗議しよう」

少尉は、指揮刀に手をかけ、

「貴様は帝国軍人に反抗するのか」

と焦立って怒鳴り返した。そして、その生徒を突きとばし、コンクリートの舗石の上に打ち倒して足蹴にした。それから、倒れた生徒を尻目に、「駆足、引揚げ」と小隊に号令した。伏射ちから起き上がった兵士たちは、銃を担いで、再び軍靴の騒音を立てながら、代々木上原への裏門を駆け抜けて行った。

事件のあと、寮委員は、学校に派遣されていた配属将校に抗議して、連隊長に謝罪を要求した。配属将校は、予備役に退いた後、戦争のきな臭い気配とともに現役に復帰した物わりのいい老

大佐だった。彼はすぐに電話で連隊副官を呼んで叱りつけ、副官も恐縮して中隊長に抗議を伝え、翌日問題の少尉を連れて高等学校に謝罪にやって来た。上官に命令されて、少尉はひどくふてくされた様子で、寮委員と立会いの生徒主事の教授に渋々頭を下げた。

——そんなことがあってから一年後の夏、蘆溝橋事件をきっかけに日華事変が起こる。さらに四年後の十二月、軍部は米英を相手どって戦争を拡大した。百年も続く大戦争だと、軍部やそれに追従するものたちは呼号し、まるで、戦争のためにだけ時間があり、その運命をこの国のだれもが免れることが出来ないかのように強弁していた。

カーキ色の軍服をまとったものの手先は、いまや学内をのさばり歩いた。

太平洋戦争が始まって二カ月目の一九四二年の二月八日、京都の第三高等学校で次のような事件があったことを、われわれは伝え聞いた。

その日は、戦争勃発日にちなむ「大詔奉戴日」の儀式で、生徒たちは銃をもって集まることを強制されたのだが、それを無視するかのように、何十人も生徒たちが遅刻して朝礼に出て来た。この有様に怒った配属将校は、遅刻者たちの群に裸体になれと命じた。二月初旬の京都はしんと凍りつくような底冷えに包み込まれる。とりわけ比叡おろしが雪まじりに痛いほど吹きすさぶ厳寒の朝だった。裸形になった生徒たちは、さらに運動場を駆け回れという命令された。すると、一人の生徒が銃を持った隊列から離れて、屈辱的な命令を発する男の背後に近づくなり、銃の台尻で打ちのめした。

その生徒はこれだけの行為のためにけっきょく退学処分になったが、われわれは当時もつと

英雄的なエピソードとして、驚きをこめた賞讃の口調でこの三高生の話を語りついた。

われわれの基調には、明らかにアンチ・ミリタリズムがあった。しかし、その声を露わにしないほうがいいと忠告する教授もいた。奇怪なカーキ色の影に似たものが高等学校の校舎や寮内に出没しているというのだった。妙に目つきの鋭い、ひねこびた顔の男が、入学期でもないのに真新しい制服制帽をつけて、寄宿寮の中を歩いているのをみた。すれちがいざま、神経を逆撫でされた感じを変だなと思ひ、声をかけようと振り返ると、逃げるように歩き去って、裏口から消えて行つた。そのあと、生徒が寮室で日常の感想など記していたノートや、日記が何ものかに持ち去られているのが発見されたりもした。

寄宿寮の便所の中に入り込んで、落書をメモしている男を認めた生徒もいた。

軍人は小児に等しい、勲章を好む

戦争は冷血なる国家の利己主義である

山のあなたの空遠く戦いなき国ありという

——こんな警句が壁に刻まれているのを、われわれは用を足すたびに身につまされて拾い読みしていた。それをなぜわざわざメモするのか。目撃した生徒が詰問すると、「おれはペンキ屋だ」と、おおよそ職人らしくない傲岸さで答えて、男はそそくさと便所を出て行つた。

「私服がいる。憲兵の私服が……」

と寮生たちはささやき交わした。

戦争は、われわれが高等学校に入る前後、そんな形で——つまり、校舎に兵を指揮して侵入す

る将校や、生徒たちに屈辱を強いる配属将校や、変装して生徒たちの動向を探りに来る私服憲兵という形で、濁った瘴気のように学園の日常に入り込んでいた。そうすることでゾルは、戦争を誇示し、早くから「非常時」だと絶えず大声で唱えつづけ、人があたりまえに日常的事であることを禁じているようだった。

実際、物心ついて初めて視覚に焼きついた新聞の写真にしても、片隅に複葉の飛行機の翼の端が写って、その下で中国のどこかの町が爆撃による煙を上げているものだった。満州事変だの、上海事変だの、血なま臭く、硝煙臭いことばかりが、記憶の世界に殺風景な領域をくり抜けた。

そして「非常時」という表現で、非日常の時間を押しつけられることに、われわれは感覚的に飽き飽きしていた。それはわれわれにとって「止まった」無意味な時間だという気がして来た。ついに戦争こそが尋常なのであり、戦争が神聖なものであると言われることを、嫌悪し始めた。戦争が大規模になればなるほど、かえってそれは虚構のものではないかという不信感が内心に芽生えた。

一方では、この時代に異端と呼ばれたすべて非戦的なものとか、たとえば通りすがりの季節の装いの少女とか、何でもない日常の姿や形をとったものに、溜息をつきたくなるほどの新鮮さや、美しさを見出して、心奪かれた。

そんな時期、南寮三十一番室という高等学校寄宿寮の音楽部の部屋には、一般に強いられていたのとは、異なった季節が息づいているかのようであった。たとえ時計台の時間は止まっていなくても、棚に虹彩がかかったように置かれた楽器や、部屋の住人たちの蜜柑箱に昼間はふくろ、うのよ

うにかくされた蔵書にも、過ぎ去った日々に撒き散らされた花卉からはふり落ちる、別の時間の持続されている感じがした。

一九四三（昭和十八）年の四月、すでにミリタリズムの滲透していた中学から、いきなり異境に移植されたように私はその部屋に住みついたので、いっそう印象が際立っていたのかもしれないが、なによりもそこには、硝煙の匂うカーキ色の装いをしたものに陽差しを遮られた灰色の翳がなく、南と西に開いた玻璃窓から大きな楡の梢越しにのぞく空までが、ギリシヤ風の快適性をたたえているように思えた。

南寮の建物は、四つ並んだ寄宿寮の中でいちばん南側にあったけれど、一つだけ窪みこんだ低地帯に沈んだように建ち、立地条件からいうとむしろ陰気な寮だった。その辺りは、もと駒場の農科大学であった時代に、実験に使われた動物たちを埋葬した場所でもあるのか、三階建の建物を囲んで異臭を放つ羊歯や雑草（その臭いの何ほどかは寄宿生たちが窓から排泄する長年の習慣によるものかもしれない）の繁みから、時折鬐髀や骨片をのぞかせ、減入った怪奇な雰囲気さえも寮にまつわさがちだった。

にもかかわらず、音楽部の部屋は、そこだけ雲の裂け目から陽光がパッと差し込んだように明るかった。そういう印象は、私が入学前の受験のため長崎から上京して、音楽部の部屋に泊めてもらったときに始まる。

東京に親戚もあるものの、世話になって合格出来なかったりして恥ずかしい思いをするよりはと、試験場の校舎の下見に行った帰り寄宿寮の委員室を訪ね、寮の空いているベッドを受験期間

中借りられないだろうか、と私は頼んだ。

紺紺の着物に袴をつけた丸刈頭の寮委員は、如何にも厳めしく融通の利かない感じだったが、意外なほどあっさりとして寮室での宿泊を認めた。寮に知己の先輩がいないのを聞くと、

「おなじ泊るなら、入学出来たとき入部を希望する班の部屋に泊ったほうがいいね。どこの班がいい？」

と訊ねた。音楽部にしたい、と私は何となく答えた。合格の自信もないのに、部活動のことまでとても考えていなかったが、私の長崎の家では、父は音楽を趣味にし、家にあるピアノは町で外人演奏会の開かれる度に貸出され、七つ八つ年の離れた姉も、結婚前は東京でピアニストのレオ・シロタの弟子だった。そういう環境に育ったのと、自分自身音楽で身を立てようとは思わな

いまでも、中学時代音楽鑑賞班に属していたことから、自然そんな答えが出たのだろう。

寮委員は私を連れ、北寮の委員室から次第に下り坂になる渡り廊下を通じて、南寮二階の西端の三十一番室へ案内してくれた。寮委員がドアをノックして開けると、西の窓に向いたベッドに、春先の午後の曳光の温もりを求めるように足を伸ばした一人の生徒が、開いていた本から目を見て、真直ぐにこちらを見た。

「彼を泊めてやってくれないか。受験生だけど、入ったら音楽をやりたいそうだ」

「いいよ」

きわめて手短かに答えて、ただ一人の在室者はまた本に視線を落とした。

寮委員は名前も聞かずに、私をそこに残して帰ってしまった。とまどいの気持で、私は自己紹

介のきっかけさえもつかめず、戸口に立って室内を見回した。机に、畳一枚を敷いた寝台を椅子代わりにくつつけた形で、六、七人分の席が思い思いに排列されていた。黄色にくすんだ梁の彎曲する漆喰の天井に目を移すと、落書の黒い音譜が網膜に躍った。譜を迎えると「ラ・マルセイエーズ」だった。その下で絃の切れたコントラバスが埃を浴びて棚に安らっていた。目の前の机の本棚に、鉛筆とペン軸と歯ブラシとリンゴの芯の雑居したコップが突っ込んであった。

窓際の寮生が、思い出したように顔を上げて言った。

「ぼくの前の席以外はみんな家に帰って空いているから、好きな場所を使ってくれ」

物静かだが、ぶっきらぼうに聞こえる。伸びるにまかせた髪が襟にこぼれているのに、横顔は青白く端正に整い、少年の面影と老成とが奇妙に同居している感じがした。

通りすがりにちらと見ると、量子力学の本のケースが机の端に置いてある。手にしているのは物理学書なのだろう。彼が羽織っている制服の襟に理科生であることを示すSの襟章があった。

と、彼は本に目を落としたまま、

「きみ、食事はどうするの？」

「外食するつもりです」

「ヒーターがあるから、お茶ぐらい勝手に沸かして飲むといい。その辺のヤカンを使って。飯も炊こうと思えば炊けるんだ……」

彼は、向い側の席のベッドの下を身体を伸ばしてのぞくようにした。石炭バケツがあって、紙袋にいられた米が入っていた。

無頓着そうにみえるが、案外親切なのかもしれないと思った。夕食後、私が南の窓際のベッドで所在なく参考書を掘っていたときだった。食堂から帰って来た彼は、反古らしい紙の束を持っていて、「みてごらん」と私に渡した。

それは廃棄処分になった五、六年前の入学試験の数学の答案だった。

「摂生室の医者が音楽部のコーチなんだ。さっき遊びに行ったら、これを学校から払い下げてもらって論文の下書用紙に使っていた。参考になるかと思って借りて来たよ。点数のつけ方をみるといい。」

ふつう入学試験は減点法だと思われる。だが、この答案の採点をみるとそうでもない。少しでも数式が立っていると、その分だけ点数をくれているだろう？——」

たしかに、答案を繰って行くと、解答に到らなくてもたった一行数式が書いてあれば、五点とか八点とか加点してあるのだった。

「どうせ選抜試験だから、一点でも多いほうが有利さ。万一答えが出そうにない問題に行き当たるときも、わかってることだけは一行でも一字でも書いて置くほうがいい」

多分これは懇切な指示であつたであろう。私は文科丙類のフランス語のクラスを受験していて、数学や理科は得意でなかったが、せめてわかったことだけでも書いて置こうと決意した。試験がどれほどの出来ばえだったか覚えていないが、結果的に合格したのだから、彼のアドバイスは効果があつたにちがいない。

夜の十時過ぎ、私が寝ようとすると、彼は楽譜を抱えて「練習に行く」と出て行った。パッハ